グローバリゼーションの時代における共有「知」の再生

― 地域の「知」と，生きた「教養」の再興 ―

中　村　春　作

Regeneration of common 'knowledge' in the age of globalization

― Local 'knowledge' and revival of living 'Kyoyo' ―

Shunsaku NAKAMURA

1．東北大震災と街の書店

みなさまもよくご存じのように，昨年（2011）3月11日午後，日本はかつて経験したことのない大災害に見舞われました。日本の東北部を中心とした大地震と，そのあとの大津波です。ちょうどそのとき，私は大阪の自宅で国会のテレビ中継を見ていたのですが，遙か遠く離れた大阪にも気持ちの悪い横揺れが到達し，慌ててテーブルの下に隠れました。そしてそのあと，テレビでリアルタイムで見てしまった光景，どす黒い大波が，町を，車を飲み込んでいく惨状を，今も悪夢のように思い出します。大地震，大津波といえば，2004年のスマトラ島沖大地震の災害を，私たちはついこの前の出来事として覚えています。同じ大災害を被った国民として，みなさまにも，私たちが抱いた恐怖と悲しみをご理解いただけると思います。そしてちょうど一年が経ちました。福島の原子力発電所の事故や，政治の対処のまずさなどが目立って，今に至るもなかなか復興が本格化していないのも事実ですが，私たちは，徐々に，日常を，普通の生活のリズムを取り戻しつつあります。

日本には「天災は忘れた頃にやってくる」という名言があります。これはある科学者が言ったことばなのですが，私たちは，「千年に一度，百年に一度」の災害というと，何か遠い将来のことのように思ってしまいがちですが，それは実際には，明日かもしれないし，明後日かもしれないということを，本当に身をもって知ることになりました。そして，生きること，死ぬことについて考えることの重要性，「死を忘るな」（Mement mori）という命題と共に今を生きることの重要性を，私自身，思い知らされました。

このところ，震災，津波から一年を経て，多くの日本の雑誌が多様な特集を組んでいます。その中に一つ興味深いものがあったので，まずはそれを紹介したいと思います。それは『週刊ポスト』（2012.3.9）という一般向け週刊誌の，「3.11から1年　復興の書店」と題された特集なのですが，その特集の副題は「本は生活必需品だった」というものです。この雑誌はしばらく前から，「復興の書店」という特集を継続して掲載していて，震災，津波直後の大混乱の時から，実は被災地で町の小さな書店（本屋さん）がなんとか露天でも店を再開しようとしたこと，また，生きるのにもたいへんな状況であるのに，人が飢えたように本を求めたということを断続的に掲載していて，私に深い印象を残しました[1)]。今回の特集では特に地域の小さな書店を特集して，彼らの生の声を伝えると共に，どんな本が被災者に求められたかを示しています。よく売れた本としてあげられているのは，まず辞典であり，手紙の書き方，マナーの本であったと記事は伝えています。被災した人々が，遠いところに住む友人や助けてくれた人に連絡を取り，お礼を言うのに必用だったということです。そして思いがけないベストセラーに10年間使用可能な日記帳「10年日記」と，航空写真入りの「海釣りガイドブック」があったことを記しています。「10年日記」は，こういうときだからこそ，あえて将来をしっかり構想するために人々に求められ，「海釣りガイドブック」は，そこに載せられている被災前の沿岸部の美しい姿（写真）を見るため，懐かしい思い出を眼に焼き付けるため求められたのでした。実用の書だけではなく，いわゆる「硬い」本，人の生き方を論じた本も求められたことを，この特集は記しています。そして「被災地で売れる本には理由がある」「私たちは本の力を信じたい」と私たちに語りかけます。

ところで，この特集の冒頭ページには，笑顔いっぱいの女性書店員の写真が載っています。佐藤純子（Junko SATO）さんという大手書店チェーン仙台支店の店員さんです。彼女が勤めているのは，現在，

日本最大で専門書籍を最も多くそろえる，ジュンク堂（Junkudo）という書店チェーンの支店なのですが，この店は，震災後どこよりも早く店を開いたことで知られています。実はこのジュンク堂という書店は，本店が神戸市（三宮）にあり，そこから全国に広がっていった書店チェーンなのです。ご存じのように，今から17年前（1995.1.17），神戸を中心とする大地震が発生し，きわめて大きな被害をもたらしました。そのとき，一面焼け野原のなか，「早く書店を開けて欲しい」という被災者からの要求に応えて店を再開したのが，このジュンク堂の社長であり，その経験を基に，仙台支店も震災後すぐの再開を目指したのです。「こんなときに誰が本など読むか」ではなく「こんなときこそ本を読みたい」ということだったのです。この写真の女性，佐藤純子さんは，ご自身のブログ（「私は本になりたい」）を持っておられて，そのなかで，書店再開の喜びを記しておられます。（2011.4.5「私たちはまた本屋になりました」）
http://flat.kahoku.co.jp/u/junko/my7j25SU3Hn6XRLKQWVt/

ジュンク堂書店仙台ロフト店は
昨日から営業を再開しました
わいわい！ひゃっほう！
もうもう，うれしくてうれしくて
昨日も早起きしちゃいましたが
今日も早起きです

昨日は十分な告知もできないままに開店したにもかかわらず
たくさんのお客さまにご来店いただきまして
ほんとうにほんとうに，うれしいです
ありがとうございました
（…中略…）
みなさんと，つながっていられること，ありがたくて
うれしくて，しあわせです
ほんとにほんとにありがとう！
（…中略…）
今日も明日もあさっても
来週も再来週も来月も再来月も来年も再来年も
私たちは，本屋です
ずっとずっと本屋です
（…中略…）
ジュンク堂書店仙台ロフト店
本日も10:30から18:00まで営業いたします
みなさまのご来店をお待ちしてます
本を，ことばを，きもちを，ちからを
届けるお手伝いをさせてください
また，これから，ずっとずっと

本がみなさんの，あなたのちからになりますように
ほんのちからもひとのちからもしんじてます
ことばのちからもしんじてます
揺れたあの日から，すべてのことばの意味が変わってしまったけれど
それでも，やっぱりことばはだいじでたいせつで
（…以下，略）

心に沁み入る美しい文章です。特にひらがなを使って書かれた，引用最後の数行は胸の奥に響きます。私は普段，ブログの文章は，なんであれ適当にしか読まないのですが，これには本当に嬉しくなってしまいました。何も無いときでも本が読みたい，いや，何も無いからこそ本が読みたい，そしてその「ちから」で人とつながりあいたい，そういう気持ちが直に伝わってきます。

私は以前，歴史写真集で，1945年，日本敗戦後すぐの市場の光景を見たことがあります。それは道端に出された屋台の上にほんの数冊の粗末な本が売られており，そこに黒山の人だかりが出来ている写真でした。食べるものがなくても人は知識を求めます，本を求めます。それは昔も今も変わらないのです。こんなにインターネットが普及し，スマートフォンでWebが簡単に閲覧でき，iPadで小説を楽しめる時代になっても，人は本を，活字を求めるのだということに，私はあらためて深い感銘を受けました。私たちはなぜこんなにも本を求めるのだろう，活字を読みたいのだろう，と。そしてそれに応えようとする地域の小さな書店の人たちの奮闘にも感銘を覚えました。

震災からの復興が，無機質なコンクリートの街への再生ではなく，可能な限り，こうした「生きた」小さな地域のつながりを再生するようなかたちで為されることを，私は望んでいます。

2．ポストモダンの時代の「知」

この雑誌の特集でとりあげられているのは，昔から街中にある小さな書店と地域の人とのつながりなのですが，実はこうした，街なかの小さな書店は，いまどんどん無くなりつつあります。グローバリゼーションの巨大な波は，東北地方のみならず，日本全国の村々にまで押し寄せています。本は巨大なチェーン店か amazon で直接購入するのが普通になり，近所の小さな本屋のおばさん・おじさんと購読者との直接の結びつきは，断ち切られつつあるのが現実です。私は長く大学教師をしていますが，学生たちが本屋に毎日のようにでかけて新刊書を物色するという習慣はすっかり姿を消したようです[2)]。これは本屋さんだけに限りません。地域の小さなコミュニケーションの場や，生身の人と人のコミュニケーションの機会は，どんどん減少しています。私が大学生だった1970年代，多くの人が毎日のように入り浸っていた町の「小さな喫茶店」は，どんどんつぶれてしまって今はほとんど見かけなくなりました。その代わりに町中に溢れているのは，Starbacks や Doutor の，こぎれいで均一化されたチェーン店のコーヒーショップばかりです。そこで人は，会話や読書を楽しむのではなく，携帯電話の画面を無表情にじっと見つめるか，あわただしく仕事の書類の整理をするばかりです。情報がインターネットに載って世界大で同時化する一方，生身の小さなコミュニケーションの空間が失われつつあるとも言えるでしょう。

かつて，ドイツの哲学者，ユルゲン・ハーバーマス J. Habermas によって，議論する公衆や公共性の起源として論じられた，市民のサロンや喫茶店における公共的空間は，その歴史的生命を喪失し，いまはそれがインターネットの仮想空間に取って代わられたように思われます。そしてそれは，私たちの「知」の姿そのものをも変質させてしまいました。文化人類学者，青木保（Tamotu AOKI）は，情報を「早い情報」と「遅い情報」に二分し，インターネットに代表されるような，目の前を刻々通り過ぎる「早い情報」に対して，すぐには効果を示さないものの，本質的なところから「知」として体内化されてくる「遅い情報」の重要性と，その復権の必要性を説いていますが，さきほど述べた，今回の被災地における「本」「活字」の復権を目にするとき，もう一度，自らの「知」の在り方を問い直してみるべき時期に来ているのではないか，と私は思うのです。

いま言及しましたハーバーマスの著書，『公共性の構造転換』（Strukturwandel der Öffentlichkeit, 1962，英訳は1989）のテーマは，「未完のプロジェクト」としての「近代」の救済に向けて，「市民的公共圏」に元来あったはずの「コミュニケーション的合理性」を救い出すことにありました。彼はまず，17～18世紀西欧において成立した，「国家」から自立した領域としての「市民社会」が，市民たちによる自由で批判的な討論の「場」において作り出されたと論じています。そして，家庭など「親密圏」を超えて，サロンやカフェで交わされる芸術や文芸をめぐる討論を経由して形成される「共同性」を，彼は「市民的公共性」を構成する「公衆」の特質としてとらえました。こうしたブルジョア的「公共圏」はまず，サロンやカフェなどで芸術を語り合う「文芸的公共圏」として成立し，そこでの意見交換や討論を経て，国家を含む公的な話題を語り合う「政治的公共圏」が成立したと彼はします。読書や討論を介して為される「国家」の外側の批判的空間がそこに成立した，と彼は考えたのです。

ところが，こうした「市民的公共圏」は，マス・メディアの発達や政治の経済化の進行のなかで，「国家」と「市民社会」（外部）との境界が不透明になるにつれ，「公共性」は時に「私的経歴の暴露圏」に堕し，「市民的公共圏」そのものが国家に統合されて批判的機能を喪失していった。これをハーバーマスは「受容的公共圏」と呼び，西欧社会が歴史的に経験した「構造転換」であると論じたのです。彼の課題は，元来「市民的公共圏」に内在していたはずの，自由で批判的なコミュニケーションの可能性を回復することにあったのです。ハーバーマスが議論した1960年代から，今日の世界はさらに大きく飛躍し，急速に変容してきました。グローバリゼーションの急速な拡大と同時に，世界内に新たな地域対立やエスノナショナリズムが叢生し，宗教の対立がまことしやかに語られるようになってきました。そうしたなかで，ますます私たちの「開かれた公共圏」の行方は不透明になっているようです。ちなみに，今日の，インターネットが新たな「開かれたコミュニケーション空間」を私たちに与えてくれるというというのも，一つの「幻想」に過ぎないと私は思っています[3)]。

ハーバーマスが論じたように，人は封建世界から

「市民」として離陸し，その過程でブルジョア公共圏を成立させたのですが，それがさらに「国民」nationとしての単位に回収されていった20世紀において，「開かれた公共」という命題は，現代に，「未完の課題」として持ち越されたと言えるのでしょう。今日，世界各地でNPOやNGOの意義が語られる際に，しばしばハーバーマスの議論が思い起こされるのもその故であろうと思います。「市民」とは何か，「公共性」とは何か，という「近代」に発生した課題が，ポストモダンの今日，あらためて新鮮な課題として立ち現れてきたのだと思います。急速に展開する世界規模の高度情報化の嵐のなかで，指針となるべき学問や共有する「知」を喪失したまま，私たちは止めどない情報，分散化した情報の大海を漂っているようです。そしてそうした私たちのよりどころの無さをすくい上げるようにして，ナショナリズム／エスノナショナリズムや，大衆迎合的に過激を競う政治風潮が現れたりしています。私たちは，いま一度，自らの生の生活や自らを取り巻く小さなコミュニケーションの場に密着した，共有する「知」，互いにつながり合う「知」の世界を取り戻す時期に来ているように思われます。最初に紹介した雑誌特集の，震災直後の書店の復活，本を求める人たちの声，「いきるちから」としての本へのまなざしは，そのようなことを私に想起させました。忘れかけていた「知」の原初の「ちから」を，私に思い出させました。ここでは，そのことを，私の専門である思想史の場面から考えてみたいと思います。

3．近世日本思想のなかに知的公共圏の発生を見る

日本思想史において「知」の「公共性」を語るとき，しばしば言及されるのが江戸時代，大阪の町中にあった，懐徳堂Kaitokudoという学問所のことです。先年亡くなった社会史家，阿部謹也（kinya ABE）は，『「教養」とは何か』（1997）という本のなかで，ハーバーマスのいう「公共性」をていねいに紹介した後，「公共性をもたない歴史はない」として，日本で「読書する大衆」「批判的に討議を行う公共圏」が生まれ得た可能性として，懐徳堂という学問所のことを取り上げています。彼は，先行する米人研究者，テツオ・ナジタの著書『懐徳堂－18世紀の「徳」の諸相－』（Tetsuo Najita "Visions of virture in Tokugawa Japan The Kaitokudo Merchant Academy of Osaka", 1987）を基に議論を展開し，懐徳堂という学問所が「町人だけでなく，武士や農民も参加しており，基本的に平等な関係の中で学問が営まれていた」こと「運営も当時としては異例なほど合理的であった」ことに注目し，そこにおける「読書する公衆」の発生を論じています。彼らの運動は，その後，政治的集団として成長することがなかったため，近代西欧における市民的公共性に結実するには至らなかったが，そこには明らかに「知の公共性」への志向を見いだすことができる，と阿部は指摘しています。一方，テツオ・ナジタは，より本格的に懐徳堂における学問の内実に肉薄し，そこにおける「知」の位相が，それまでの儒学世界とは異なる，地域や階級を横断する新しい「知」のネットワークを形成したこと，その議論の中身が，従来の伝統的経典解釈に固執しない，批判的で自由なものであったことを，分析的に明らかにしています。

では，彼らが注目する，懐徳堂という学問所は，どういう学校で，そこでは何がどのように学ばれていたのでしょうか。

懐徳堂とは，享保九年（1724），江戸時代，商人の町，大阪に，商人たち（町人）自身の手により創立された学問所の名です。「懐徳」という名称は，『論語』のなかの「君子懐徳（君子は徳を胸の内に懐く）」に由来します。学校を作った人たちは，五同志と呼ばれた，裕福で好学の町人（chonin）たちで，それぞれの職業は貸家業，醸造業，問屋，小売業などでした。これは江戸（東京）に作られた幕府直属の学校（昌平坂学問所）とは大きく性格を異にします。学校は代々，基本的に町人たちによる出資金およびその利子で運営されました。そして，明治２年（1869）にいったんその門を閉じますが，大正時代にまた再建され，その後，かたちは変えつつ，今も市民に対する啓蒙活動や学習講座を運営しています。私自身も，この懐徳堂の流れの中にある市民講座で何回か講義をする機会に恵まれました（ちなみに，現在の大阪大学の母体の一つがこの懐徳堂です）。

懐徳堂の学校としての特徴を性格を端的に示すのが，学校の玄関に掲げられた「壁書（Hekisho）」（学校規則）です。それは，「学問するのは，道徳を完成させ，職業を勤め上げるためであるから，たとえ教科書（書物）を持っていない人でも，授業を自由に聞くことができる，また，授業中でも仕事の用事

があれば，何も断らずに退席してよろしい」，「武士は上席に座るが，授業が始まってから来た人は，身分に関係無く，順番に座れば良い」，「初めて授業に参加するときは，支配人のところに申し出ること」，というシンプルな三ヶ条からなるもので，今日の目から見ても，きわめて新鮮な学校の姿を示すものです。この学校で学ばれたのは儒学 Confucianism（特に朱子学 Zhu Xi school of Neo-Confucianism）ですが，当時，東アジアにおいて学問といえば儒学だったので，それは何も不思議なことではありません。むしろ，支配階層（武士）ではない人たちが，「自ら」の学問として主体的に儒学を学んだという点にこそ意義があります。儒学は古代のテキスト（経書）の解釈（注釈）を通じて今の世界の問題を考える学問ですので，彼らも経書，特に四書について多くの注釈を行い，たくさんの著作を著しました。その中で私が注目するのは，懐徳堂を代表する町人学者，中井履軒（1732-1817，Riken NAKAI）が，著書のなかで多用する〈通人 Tujin〉ということばです。

〈通人〉というのは彼の経書注釈に特有のことばで，辞書のなかにも正確な定義はありません。しいて解釈すれば「普通の人」「あたりまえの人」といった語感でしょうか。たとえば『論語』（Lun Yu）のなかに「最高の知識人と，最低の馬鹿者とは，どうしようもない（加工しようがない）」という箇所があります。その箇所の彼の解釈を少しことばを補って現代語訳すると，以下のようになります。「いま，〈通人〉に向かって尋ねてみよう，あなたは最高の知識人か，と。きっと，いやいやそんな者ではない，と答えるであろう。逆に，あなたは最低の馬鹿か，と。いや違う，と答えるはずだ。つまり，私たちが考えるべきなのは，そうした普通の人たち，〈通人〉にとっての学問なのだ」。経書解釈史に残される伝統的儒者の詳細な議論からすれば，一見，稚拙にも見える議論ですが，ここには，町人にとって「生きた」学問の姿が鮮明に現れています。そして，そのようなかたちで，近代に至るまで，市井の人々が，儒学を自らの学問として，脈々と学びつづけたことの意義を，私は考えたいのです。彼らにとって「本を読む」ということは，たしかに，現実の生活と密につながっていました。生業と表面的にはつながらないけれども，その営みを底で支えている，そういう意味での「実学（Jitugaku）」でした。そして，こうした「知」の水平的拡散は，懐徳堂に限らず，江戸時代後期の世界に一般的に見いだすことのできることでした。それは寺子屋，私塾（Shijuku）といった名前で知られる，江戸時代の教育システムと連動するものでした。

4．江戸時代における「学び」の姿

江戸時代後半，特に1800年代に，日本全国に寺子屋，私塾，藩校と呼ばれるきわめて多くの学校が創立されたことは，よく知られています。教育史の研究者は，それを「教育の爆発」の時代と呼んだりします。寺子屋とは，町の知識ある人たちが，子供たちを教え育てる小さな学校（寺に付随して作られた場合もあったことから，一般に，寺小屋（Terakoya）と呼ばれますが，必ずしも仏教とは関係ありません），私塾 Private Academy とは，江戸時代の思想潮流を担った学者たちが日本全国各地で開いた学校の名です。江戸時代の学問の多くは，支配階層（武士，大名）以外の町人たちによって支えられました。この点は，同時期の同じく儒教を学問の主流とした，中国，朝鮮と大きく異なる点です），藩校とは，当時300程度に分かれていた国々（藩・han）で，主として武士の子弟に学問を授けるために設けられた公立学校です。いくつかの統計によれば，1600年代から1700年代にかけて漸増してきた私塾や寺小屋は，1800年代に入って急増し，10年単位で100校以上の増加を繰り返すようになります。それらはすべて民間の学校でした。もちろん公的な学校，藩校も同様の展開を示しています。これは，その実在を文書等で確認できたもののみの総計ですので，実数はもっともっと多かったと思われます。なぜこの時期に，こうした「教育の爆発」が起こったのかについては，いくつかの意見がありますが，ここでは省きます。

その他にも，江戸期に始まった「国学」（Kokugaku）という，日本独自の歴史や文化を重視する学問も，当時普及しだした大量木版出版に担われて，全国各地で読まれるようになります。この「国学」の読者は多くの場合，地方の上層農民でした。たとえば平田篤胤（1776-1843，Atutane HIRATA）という学者の書物は，地方の素封家の手で続々と自主出版され，辺境の山奥の農民にまで普及します。後に明治維新の一つの原動力になった政治グループも，そうした読書グループから発生しました。あるいは，九州地方の片田舎（日田 Hita）に居住した，広瀬淡窓（1782-1856，Tanso HIROSE）という学者（実

家の本業は古着屋）は，独力で学問を修めた結果，私塾，咸宜園（Kangien，この塾の名前の意味は「みな来てよろしい」）を開き，そこで学んだ学生数は，北は北海道から南は九州まで，明治に至って塾を閉じるまで，のべ3,000人にのぼります。

こうした現象を前にして私が関心を持つのは，いったい人々はなぜこのように学問を欲したのだろう，なぜこんなに一生懸命本を読んだのだろうか，ということです。よくご存じのように，江戸時代は士農工商に区分された，世襲の身分制社会でした。農民の子は農民でした。にもかかわらず，彼らはなぜ自ら学んだのでしょう。「科挙」という統一試験があり，それを介して，官僚に身分上昇する可能性が「原理的には」あった，同時期の中国，朝鮮の状況と，近世日本の状況は決定的に異なります。にもかかわらず，この時期，彼ら（町人や百姓）はなぜ，発熱したかのように，本を読み，自ら学ぼうとしたのでしょう。このことを説明する議論はいくつかありますが，私自身まだすっかり納得する考えを持ち合わせていません。ただ一つ言い得ることは，そこで学ばれたことがらは，彼らにとって，決して自分の外側のことがらではなかったということです。寺子屋の学習は，一般に「読み，書き，算盤」（Yomi Kaki Soroban）と称されるものであり，そのなかに道徳的徳目が埋め込まれているものでした。知識は手紙の書き方という実践的な方法で学ばれました（「往来物」と総称される書物群が大量に出回りました。「往来・Orai」とは，元々手紙の往復を意味します。）。学問は文字通り「実学」（Jitugaku）だったのです。町人に好んで学ばれる儒学も下層武士が学ぶ儒学も，遙か昔の，自分の今の生活とは無関係のお題目ではありませんでした。それを学ぶことは，生の生活，生き方とつながっていたのです。

そして，そうした彼らの知識欲を支えたのは，当時実現した大量出版物の流通でした（ベネディクト・アンダーソン『想像の共同体』B. Anderson "Imagined Communities" 1983，の議論が思い出されます）。その頃ある学者が，「昔は先生を探して遠く出かけなければ勉強できなかったが，いまは本さえあれば，誰でもどこでも勉強できる」（江村北海，Hokkai EMURA）という発言を残しています。彼らはまさに，「本」を媒介にして世界につながり，「本」を読むことによって今の生活の意味を考えたのです。「学ぶ」ことと「生きる」こととの間に隔てはなかったのです。さきほど述べた，大阪の町人の学校，懐徳堂の儒学などは，まさしくその典型と言えるでしょう。こうした「学び」の姿，「学び」の喜びは，なぜ今日，見失われてしまったのでしょう。

それを語るには，ここ百数十年来の，近代の「知」や「国家」，教育制度（公教育）の来歴から語り始めなければなりませんが，ここでは一気に中間をとばして，現代日本における教育の難題について語ることから考えてみましょう。グローバリゼーション，市場万能主義の圧倒的な破壊力の下で，今日，生きた「知」としての「実学」が，きわめて皮相なものに変質してしまったと考えるからです。その端的な表れが，「教養」（kyoyo）概念の枯渇であると私は考えます。

5．生きた「知」としての「教養」の脱構築

今日，日本では，教育の荒廃が長らく議論されています。最近では1980年代に「つめこみ教育」の反省から，また「落ちこぼれ」の学生をなくす目的で，政府主導で「ゆとり教育」が提唱，実施され，しかしながら，その結果，「落ちこぼれ」は全く解消されず，逆に，学力が全体的に落ちてしまったという反省がしきりになされます。かくて，制度はまたまた改変されることになりました。政治家にとって，教育は，常に格好の世論受けする話題でもあり，繰り返し「抜本的改革」が唱えられ，そのたびごとに教育の現場も当事者の学生も大混乱を来します。好んで教育を論じる人は，制度を変えれば何かが抜本的に変化するかのごとき幻想をばらまきます。

しかしながら，そうした諸方策は表面的なものでしかなく，根本はもっと深く，現代社会の性格そのものに起源するものであると説く論者もいます。社会学者，内田樹（Taturu UCHIDA）は，今日の「学びから逃走」し「労働から逃走」する若者たちの姿に，市場社会万能主義の反映を見ています。あらゆる場面で「先生，これは何の役にたつんですか」と問いかけてくる子供たちの姿勢の背後に，すべては等価交換されるべきであるとする，悪しき市場万能主義の姿を，彼は見いだしています。「教育」の消費主体である自分たちは，当然，その対価を明確に求める権利があるという生徒たちの主張は，「何のために役に立つのか」という近視眼的な功利主義の主張として表面化する，と内田はいうのです（『下流志向』2007）。事実，これに類した話は，小

学校だけではなく，私自身，職場の大学院において現実に見聞きしたことでもあります。しかしながらいうまでもなく，教育や学習は，目に見えるかたちで対価が支払われるものではあり得ません。またその効果というものは，すぐには目に見えないし，ひょっとしたら，生涯かけても分からないままかもしれません。市場万能主義社会＝学生・両親・社会の要求と，長期にわたっての学問・人格の形成を考える教師側の意識との間の裂け目は，どんどん深まるばかりです。

しかしこれは，社会や経済界，父兄ばかりの責任とは言えません。私たち教育者の側にももっと発信すべきことがらがあった，と私は考えます。それはたとえば，現代の多くの大学教員が，「教養」(kyoyo) 教育の意味を見失ってしまった点に見いだせます。

「このごろの学生には教養が無い」という嘆きは，昔からある年配者の常套句です。この頃の学生はドストエフスキーも知らない，夏目漱石も読まない，カントもデカルトも知らない……，といったおなじみの嘆き（「教養の崩壊！」）です。しかしこういう批判は決して若者の心に達することはないでしょう。なぜなら，ここで言われる「教養」とは，ある年代以上の高等教育を受けた世代に共通する読書体験に基づくものであり，それはそれで，一定の歴史的条件下の「できごと」に過ぎないからです。実際，「教養」概念の意味づけは，大正期以降たびたび変容してきました（その起源は，大正期以前にはさかのぼれません）。そして戦後は，アメリカのリベラルアーツ liberal arts という概念の代名詞としてもっぱら使用されてきました。今日の大学における，教養教育・専門教育という区分がそれに該当します。しかしながら，当事者である私たち教員も，その肉付けの論理を見失ったまま，そして一方では自らが体験した，懐古趣味的（大正期の旧制高校風の，特権的な）教養意識を同居させたまま，今日に至ったというのが事実なのではないでしょうか。

この間，日本では，大学の設置基準変更（これまた，小泉改革と称される，市場主義からなされた「改革」です）があり，大学ごとに自由に教養教育，専門教育の配分を考えてよいとされた結果，専門教育重視＝教養教育軽視，場合によっては廃止という事態が生じました。これは今日の専門研究（特に理系の）が先端化，細分化した結果でもあり，また社会に出てすぐに役立たない学問は不要とする経済界からの強い要請に応えたものでした。そしてその結果，きわめて限定された小さな領域のことしか知らない学生，応用の利かない，想像力の欠如した研究者が横行することになり，いままた，あらためて「教養教育」の再生が唱えられたりしているのです。

私たちはいったいどこで間違ったのでしょう。学び」の喜びをどこで失ってしまったのでしょう。その一つの原因は，「実学」という概念の捉え損ないにあると私は思います。現在，「実学」ということばを辞書で引けば，たとえば「習得した知識や技術がそのまますぐ社会生活に役立つような学問。商学・工学・医学などの類」（『明鏡国語辞典』2002）とあります。ここにはもちろん，文学も歴史学も哲学も入りません。「教養」などは，もっとも「実学」から遠い概念となるでしょう。これはまさしく，現代日本の「実学」意識を反映した説明と言えるでしょう。しかし本当にそうなのでしょうか。明治期に「東洋になきものは，有形に於て数理学と，無形に於て独立心」（『福翁自伝』）と述べ，学問と自己の独立を一体のものと捉えた福沢諭吉（1835-1901, Yukiti FUKUZAWA）が，「人間普通日用（Jinkan hutu Nichiyo）」に近い学としてして提唱した「実学」は，決してそのようなものではなかったはずです。あるいはまた，懐徳堂の町人たちが，一見迂遠に見える儒学経典を自らの学問とした姿勢とも異なります。私たちは，現代の経済中心主義的な短絡的「実学」理解から，一度脱却する必要があります。怒濤のように押し寄せるグローバリゼーションのただ中で，市場主義万能，対価主義万能の思考がマス・メディアや教育界を掩いつつある現在，私たちも教育の現場から，新たな生きた「知」として，「教養」を「実学」として脱構築し，その意義を提唱していく必要があると私は考えています。

政治思想史研究者，苅部直（Tadashi KARUBE）は，政治学もまた「教養」の一科目として捉え得ることを指摘しています。すなわち，「「実感」に満ちた，身近な生活範囲をこえるような社会の紐帯が，さまざまなフィクションを通じて，複雑に作りあげられている」のが「社会」であり，その「社会」を成り立たせるもっとも高度なフィクションが「法」であると捉えるならば，そのフィクションとしての「法」を運用する政治学そのものもまた，一種のフィクションの言語体系に他ならない。そうした政治学，法学の現実世界に還元される言語体系のシステムを，「そのようなものとして」その根幹から認識することが，まさしく現代に生きる私たちにとっての

「教養」なのだ，と苅部は言うのです（『日本の現代５　移りゆく「教養」』2007）。苅部が説くように，今日求められる「教養」とは，単なる読書趣味や該博な知識のことではありません。現実から遊離した高踏的精神ではありません。

私は「教養」を，現実世界の表層に自らの視界を埋没させずに，現実世界を，そのシステム（言語体系の象徴的システム）内部から読み解いていく「ちから」のことと再定義したいと思います。そう考えるとこの課題は，私たちを取り巻くあらゆる領域の背後に潜んでいます。そうした「教養」への問いを内在させた「学び」こそが，真の意味で「実学」と呼ばれるべきなのではないかと私は考えています。そしてそうした絶えざる試行を鍛錬する素材として私たちの前に在るのは，目の前を通り過ぎる情報としてのインターネット空間の情報ではなく，テキスト（まさしく，多様な問題や視点が「織り込まれた」）「本」なのではないでしょうか。人の思考力は，「早い情報」のなかで促成栽培されるものではなく，「遅い情報」（本）との格闘のなかでしか，鍛造され得ないものだと，私は信じているからです。

補注

1）この特集は，後に，整理されて一冊の本，稲泉連『復興の書店』小学館，2012年，として出版された。同書には，「……あらゆるジャンルの本が買い求められていく様子には，『人が活字に飢えている』としか言いようのない雰囲気があった」，「……大変な現状に堪えたり抗ったりするためには，やっぱり力が必要なんです。その力を養うために本が必要とされたんじゃないか」，「……僕たちは必要とされているんだ，すごく大事な仕事をしているんだ，と本当に強く感じた」等々，震災後，必死で復興を果たした小さな書店主たちの発言が採録されている。

2）『夕刊フジ』（2012年５月25日）は，「街の本屋が消える－１日１店が閉店」と題して，2011年から2012年にかけて，全国で合計365店の本屋が閉店したことを報じた。また，『東京新聞』（2012年８月12日）は，「街のどこにも本屋さんがない。そんな市町村が増えている」とし，書店ゼロの「市」が増えていることを報じた。

3）この問題については，最近，フェイスブックやグーグル検索機能の決定的な問題性（パーソナライゼーションにおける商業主義，偽善）を厳しく指摘する書物が翻訳された（イーライ・パリサー『閉じこもるインターネット』早川書房，2012年）。

引用文献

ユルゲン・ハーバーマス『公共性の構造転換』細谷貞雄，山田正行訳）未來社，1973年。

阿部謹也『「教養」とは何か』講談社現代新書，1997年。

テツオ・ナジタ『懐徳堂』（子安宣邦訳）岩波書店，1992年。

ベネディクト・アンダーソン（白石隆，白石さや訳）『定本　想像の共同体』書籍工房早山，2007年。

内田樹『下流志向』講談社，2007年。

苅部直『移りゆく「教養」』NTT 出版，2007年。

※本稿は，2012年３月22日，インドネシア，ボゴール市，パクアン大学（Pakuan University, Bogor）で開催された，インドネシア日本研究会大会シンポジウムにおける基調講演の内容そのものである。
シンポジウムのテーマは，‘The Impacts of Cross-culture Influences and Globalization towards the Existence of Local Wisdom’ というものであり，本報告もそうした趣旨に即したものである。
なお，今回の活字化に際し，最近の情報を［補注］として付け加えた。